

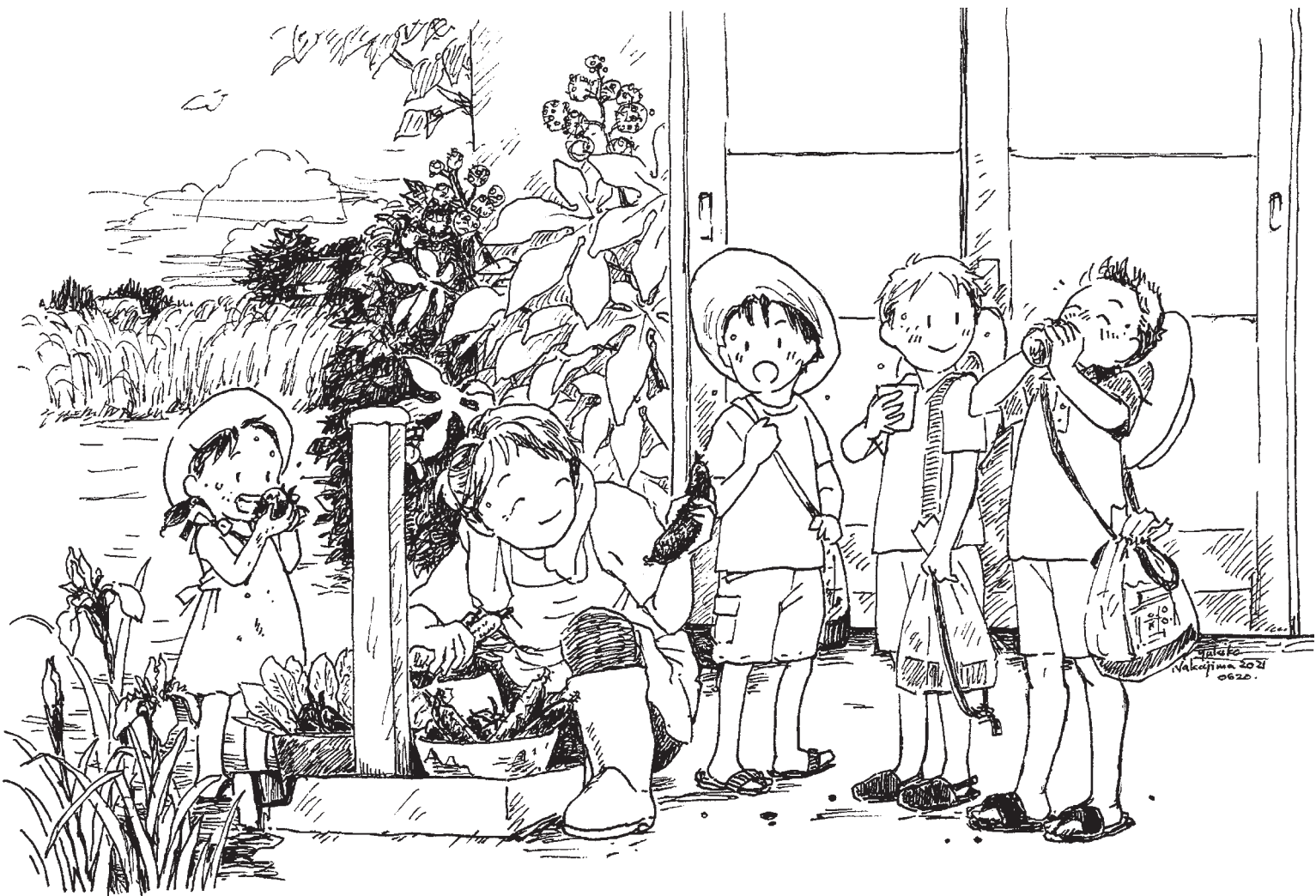
光の子



No.201 2021.7.20

●年間聖句 知る力と見抜く力とを身に着けて、あなた方の愛がますます豊かになり、
本当に重要なことを見分けられるように。

(フィリピの信徒への手紙1章9、10節より)



「暑中 ひとときの涼」

表紙絵・中島由起子

※今号の俳句は
休載します。

「だよね〜」「どした〜」と そばごっこをしよう

光の子どもの家 理事 稲塚 由美子

きつと世界は、2020年
と2021年、ひよつとした
らこの先何年？のことも、
「新型コロナウイルスに翻弄
された年月」として記憶する
だろう。

6月20日現在、ワクチン接
種の歩みは遅く、変異株の解
明もできていないだろうに、
オリンピックの中止はなさそ
うだ。一気に患者さんが増え
て医療崩壊を起こさないよう
に、人流の抑制と緩和を模索
することしか手はないらし
い。

個人的には、グローバル化
の波に乗って、地球の裏
側でも簡単に飛んでいき、人
間にくっついていっているウィルス
を免疫のない土地に運んでい
る危険性が自分にもあったの
だという自覚はある。それ以
前に、開発という名目の自然
破壊が、たとえば森の奥深く
にあったウィルスを一気に拡
散させたという人間の傲慢さ

を問わなければならないと思
っている。

けれど、今や緊急事態宣言
と解除を何度も繰り返させら
れた人々の心には、未知なる
ものへの恐れと、先が見えな
い不安の影があるに違いな
い。ワクチン接種か、特效薬
か、制度上のきめ細かい対応
策が功を奏することになるの
か分からないが、いずれ明け
ない夜はない、と思う。

それでも、コロナ禍による
経済の停滞で、ここここで肥
大化する社会問題。しかもそ
れぞれが複雑に絡み合っ出て
現している。雇用不安、貧
困、虐待、いじめ、外国人や
マイノリティ差別、ヘイトス
ピーチ、オレオレ詐欺、自衛
警察……。人は不安と恐怖を感
じれば、自覚的であろうとな
かろうと他者に対して不寛容
や排除、攻撃を繰り返してし
まうことがあるのだ。
政治の責任は大きい、こ

こでやつかないのは、ひとり
一人の心に知らず知らずのう
ちに芽生えてしまう他者への
排除、攻撃。しかも自分は正
しいと思いきむ「独善」。自
分では「正義」で、矛先を向
ける相手の方が悪いのだと本
人に認識されていて、たちが
悪い。

『光の子どもの家』も社会
の一員。例外ではない。外か
ら『光の子どもの家』に対し
て不寛容をぶつけられること
もある。反対に、いらぬ忖度
をしてしまうこともあるだろ
う。もとより、人間は社会的
動物なので、ひとり一人の職
員も子どもたちも、影響を受
けないわけがない。

職員さんたちも、もちろん
コロナ禍以前でも、子どもと
の暮らしの中で、「笑顔とき
どき顔引きつる」ことも当然
あり、それでも、子どもたち
との暮らしは営々と続く。
「何とかやっています」や「せ
つかくだから生活を楽しむプ
ログラムをいろいろ考えまし
た」という職員さんも。「プ
ログラムといえば聞こえはい
いが、『思いつき』とも言う
(笑)」というオチ付きのユー

モアがあつて、そこがいか
にも『光の子どもの家』らし
い。続いていく暮らしの中
で、あれがよかった、これが
よかつたなんて、ずっと後
になってみなければ分からな
い。それでも失敗しちゃった
ことこそを口に出せたら最高
だ。

不安と恐れが蔓延している
ような世相に押しつぶされそ
うなとき、人々の知恵は、排
除や攻撃、そして他者の支配
ではなく、菅原哲男氏の言う
伴走者、つまり「隣る人」の
実践へと向かってほしい。

『光の子どもの家』では、
話をよく聴く。何か片づけ事
をしているときには、いなし
ながらでも聴く。話す。

「だよね〜」「どした〜」
そしてくっついたり離れた
りのちょうどいい距離でそば
にいる。人間誰しも誰かの眼
差しがなければ生きられな
い。職員さん同士も、卒園生
だって、卒園したから終わり
ではない。

誰でも安心できる相談相手
や居場所が必要で、コロナ禍
だろうと原点は一緒。ステキ
だ。

無胃人の弁 (3) 抗がん剤舐めたらあかんぜ!

老健施設紅寿の里 施設長 仙道 富士郎

「光の子」に原稿を書かせてもらおうようになってから、もう何十年も経つが、記憶の限りでは、今回が締め切り日に最も近い日の投稿である。長い事文字を記すことを生業にしてきた人間にとってみれば、原稿の締め切りを守らないなどは人でなしと映る訳であり、臆病も手伝って、どんな原稿でも、締め切りのかなりに前に投稿するのが習いであった。しかし、今回だけは事情が違った。病状が悪くて原稿を書けない状態にあるという事ではない。ただ、この原稿を読んでくれる方に、病状が回復し、元気にやっていることを伝えたかったが、なかなか自信を持ってそのことが出来る状態には至らず、原稿締め切りの5日前になつてしまったというわけである。

要するに「いいふりこき」(Google)によれば、「いいふりこき」は「かっこつける人／見栄を張る人／いい人ぶる人」という意味の北海道弁なのである。がんの転移が見つかつて、そんなに長くは生きないかもしれないという状況に至つたとき、やはり、「自分はどんな生き方をしてきたのだろうか」と振り返ることになるが、まとめて言えれば、「いいふりこき」であつたなあと思い当たつた。この機に至つても、まだ格好つけたがるのである。

それにしても、がんの化学療法は、想像していたよりも数段厳しいものだった。情けないことに、80歳を超した人間が、ある時、あまりにも理不尽な己の身体に「何でこんなことになるんだ」と大声を挙げてしまった。内服の抗がん剤と新しい静脈注射の療法を組み合わせた2剤併用の1クール2週間の化学療法が、間に1週間の休みを入れながら、6クール続く。私から見れば、6クール、計18週間、4か月半過ぎれば、2剤併用の化学療法は終わりを告げるのである。人間、苦しい事でも終わりがあると思うと、頑張れるものである。ところが、これで終わりという6クール目、予想に反して、5クールまでとは全く違つた辛さが襲つてきた。2剤併用が終つたところから全く食欲が無くなり、5日間物を食へず、飲んだりすることが出来ず、点滴だけで過ごさなければならなくなつたときは、「これはちよつと大変だぞ」と、弱音を吐いてしまつた次第。

いいふりこきの私が目論んでいた今回の原稿の書き出しは、こんな文章で始まるはずであつた。「6クルールの辛い2剤併用の化学療法も終わりで、1週間の休みの後に内服だけの化学療法が始まりましたが、お陰様で元気にしております——」。この文章を、内服だけの治療が始まつて、1週間たつたところに書いて送ることにしていて、ところが、目論見は見事に外れ、私の憔悴を見て取つた主治医は、あらたな内服の開始を見送ると言い出した。まだ、辛いつ体を抱えた私は合意せざるを得ない。原稿締め切りの6月20日は迫ってくるばかりである。

しかし、万事休してこの原稿に向かつているわけでもない。最も辛いときは、食欲不振はおろか、ひどい口内炎で、麻酔薬の入つたうがい薬でうがいをしながら、水分だけ摂取していた。後で、以前大学で小児がんの治療をもつぱらの生業としてきた長男にこの話をすると、「そう言えば、子どもたちもそのうがい薬を飲んでいたなあ」とのたまう。そんなことを子どもにする人間は鬼かと思つたが、さすがに口には出さなかつた。

いつか私は抗がん剤のことを「毒薬」と呼ぶようになっていた。しかし、こんな悪態をつける身ではないことはよくわかつている。2人の弟子たちが懸命になつて、私を癌から救おうとして、投薬してくれているのだから。それに、宇宙に神様がいて、それで、神様は決して悪い事だけ

を押し付けたりはしないようだ。まだ、末梢神経障害による手足のしびれ、爪の黒化などは残ってはいるが、食べられる量は半減したとは言え、最近、おいしく食べられるようになってきたし、何より

も、これまでは考えもしたことの無い物の考え方を、神様は私に与えてくれた。今回の病気のことが無ければ、私はこのことを知らないまま死んだはずである。

渋沢多歌子氏のいふ

光の子どもの家 名誉理事長 菅原 哲男

児童養護施設光の子どもの家は子どもたちのための子どもの施設として建てられ、心豊かななはたらき人たちによって、労働者である前に人として愛することからはじめられてきたものであった。

仕事で子どもを愛せるのか。これは、開設してはたつきがはじめられたころ、職員会議などで語られたことである。そもそも光の子どもの家へのかかわり方そのものの形が、子どもたちと大人たちでは違いが大きいのである。

子どもたちは親や家族と共に暮らすことができなくなるという、究極の状態であって

くる。それも子どもだけで。独りで。ところが私たち職員という大人たちは、孤独をかこつ子どもたちの役に立ちたいという少し高ぶる思いの中であってくるのである。肩や腰の位置や心理状態も違うのである。

そんな違いを関わりの中で解決しようと願いつつ関わりを展開してきた。

仕事で子どもを愛せるか、その愛はどういう愛なのだろう、など試行錯誤が中心の働きである。

そんなはたらきを展開する私たちを温かく見守る支援者たちによって補われながら。

2月からNHKで、渋沢栄一の生涯を描く大河ドラマ「青天を衝け」の放送が始まった。これを機に、栄一翁の孫娘に当たる多歌子様との関わりを記しておきたい。

私が光の子どもの家を立ち上げるための準備のために、トラックの運転で家族の暮らしの糧を稼いでいた頃のことだ。

多歌子氏によくお声をかけていただき、東京タワーの前に陣取る渋沢ビルのお住まいやお招きいただいた。お抹茶にお呼ばれしたり、「寝転んでお休みになって」とお声をかけていただいたりもしたことは忘れ難い。

光の子どもの家がようやく認可され、建物が建ち、その運営が始まったころ、多歌子氏は友人知人と共にタカラクラブというボランティアグループを結成された。軽井沢に瀟洒な別荘を求め、私たちを招いてくださった。滞在中の費用をすべてご提供いただいたり、女性職員には化粧を勧めてくださったり……。

子どもたちにとって、夏休みを軽井沢の別荘で過ごす

という、夢のような体験だった。長くて暑い夏休みを終えたとき、友達に夏のことを話すと、うつむかずいられる豊かな日々と思いがぎつしり詰まった状態で、胸を張って駆けていく準備万端なのである。

これは、私たちにとって、何物にも代えがたい飛び切りのありがたいプレゼントであった。

このように私たちを支えてくださる方々が、今も多くいらつしやる。このような方々は、仕事以外の時間と経済と、熱い思いをご提供してくださっている。愛は報いを求めない、という。そのような純粹なはたらきをいただくことが、私たちの働きをも純化してくれていることを、心に覚えていきたい。

それから数年後の夏はじめ、軽井沢に避暑に出かけようとした多歌子氏は、秘書が運転する車が中央分離帯に乗り上げてしまう事故で急逝したのであった。

以後、軽井沢は光の子どもの家から遠く離れたままである。

猫と暮らつて

彫刻家 中島 睦雄

わが家では、だいぶ以前から猫が家族の一員のように暮らしていた。

猫は人間が大事にすればそれに応えてくれ、すっかり甘えてくるのである。

わが家では何代か猫が入れ代わったが、名前は殆ど「タマ」であった。体は大きくても「タマ、タマ」と呼んで、まるで小さな可愛い猫を思わせる呼び方をしていた。

15年も前だったと思うが、息子が職場の人から1匹貰ってきたことがあった。何でも、産まれたばかりで貰い手に困っていたから1匹貰った。残った仔猫たちはどうなったのかはわからない。

家にやってきたチビ猫（タマ）は、家内が小さい皿に牛乳を入れて飲ませようとしたが、産まれたばかりなので飲み方がわからない。そこでスポイトを使って飲ませたので

ある。

そんなことをしているうちに、自分で牛乳を飲めるようになり、猫用の餌も食べるようになった。つまり、タマは母猫のオッパイを飲んだり、甘えたりするという体験がなかったのである。

その頃、家内は病気があったのでベッドに入っている事が多く、家内はタマを、自分の胸あたりに乗せることが多かった。その為にタマも自ら家内の胸に乗ることが日課のようにになった。そこが最も安心、安定した場所になったのだろう。

時が経ち、タマもすっかり大人になり、身籠もり、そして4匹の子猫が産まれた。1匹だけよく乳の取り合いに負けてしまい後回しにされていたが、4匹ともなんとか元気に育っていった。

何日か経てある程度の大きさにになると、元気な仔猫たち

は知り合いに貰われていったが、いつも負けていたチビだけがわが家に残ったのであった。黒い毛なみから「クロ」と名付けた。

クロは母親タマの愛を目一杯受けられるようになり、普通に暮らし、普通に育っていったのである。タマにとつてもクロにとつても平和で幸せな日々が続いていた。ところが不幸は突然訪れた。

家付近の道路で、タマが車に跳ねられたのである。病院へ連れて行ったが、安楽死させる以外の選択がなかった。

その後は夫婦2人とクロ1匹が家族として、日々の暮らしを長く続けてきたが、10年位前に、家内が天に旅立ってしまったのである。独居老人となった私と、クロだけがわが家の生き残りである。

このクロが今度は独居老人にメチャクチャ甘えるのである。何かと言えば傍に寄ってくる。夜寝ていると布団の中に入ってくるのである。身を寄せることで安心するのだろう。

こんな訳で、クロは私にとつても心を和ませる存在とな

り、クロにとつても私が大事な存在になっていったのだろう。ところが、最近クロの食欲がない。好物の缶詰も口にしない。そして暖かい場所でも丸くなって寝ていることが多くなった。そのうち家へ帰ってこなくなってしまう。体力は弱っている筈だから遠くへは行つてないと、近辺を探しても見つからなかった。どこかで死んでしまったのではいかと思つた。猫という動物は、自分の死体を人間に見せないと言ふことを聞いたことを思い出したからである。

帰らなくなつてから2日目に近所の人「お宅のクロが裏の畑の脇で死んでいるよ」とのこと。行つてみると間違はなくクロであった。家から50M離れた場所、昨日探した場所でもあった。ここまで必死で歩いてきたに違いない。

私はクロを抱え「クロ!!安らかに!!」と家の梅の木の下に埋葬した。
「嗚呼クロよ、ついにこの世を 旅立つか 寂しがり屋の ジイジ残して」

共育ちカンガルー日記 (60)

優希ちゃんママの「働き方改革」

近藤 みちる

出産後しばらく離れていた仕事を再開したのは、優希が小学2年生になった春のことだった。小学校生活に優希が慣れてきた頃で、私も日中は自由になる時間が持てるようになった。ちょうど保健センターで母子保健を担当する保健師を探していると聞き、自らの育児経験を活かしてみたいという思いもあって、保健師としての再スタートを切ったのである。

優希が低学年のうちには学校の送迎もあり、喘息の発作や熱を出すこともしばしばだったため、仕事は月2回の乳幼児健診だけを担当させてもらった。ほんの3、4時間の勤務だったが、長らく「優希ちゃんママ」に徹していた私にとって、「保健師の近藤さん」になるひときは新鮮そのものだった。

優希が大きくなるにつれ学校の送迎も要らなくなり、習

い事や放課後デイサービスなど、学校以外の居場所も増えていった。それに伴い仕事を徐々に増やし、中学校入学のタイミングで、週4日朝9時から夕方6時までの勤務に切り替えた。一番やってみたかった発達支援事業を一任された。私は大いに張り切り出した。支援者としての仕事に際は限はなく、知らず知らずのうちに残業が増え、気づけば優希よりも遅く帰宅する日が多くなっていた。優希は文句ひとつ言わず私の留守を守り、家事も快く手伝ってくれた。それがいつしか日常となり、私は「優希ちゃんママ」としての自分よりも「保健師の近藤さん」としての自分に、重きを置くようになっていった。

そんな中、学校の担任から私の携帯に頻繁に電話が入るようになった。優希が学校で問題行動を起こしているとい

うのだ。授業に出ずにトイレに籠ったり、プリントを破り捨ててしまったり、先生に教科書を投げつけたり。先生方も対応に苦慮し、みんな腫れ物に触るかのようになっていくとのこと。私から優希に聞いただしてみても貝のように口をつぐむばかり。そんな優希に、私はついつい説教じみたことを言ってしまう。優希はますます頑なに。悪循環に陥っていた。

そんな矢先、優希の個別療育を担当しているK先生から思いもかけない指摘を受けた。

「この前ね、優希ちゃんが『お母さんはお仕事頑張っていて、すごく忙しいの。いつも疲れているの』って言ったの。もしかして、優希ちゃんのこと放つたらかしてない？」

私ははつとした。そういえば最近の私は、口をひらけば「疲れた」と言っている。

「優希ちゃんはお母さんのことが大好きだから、頑張っているお母さんを、自分が自立することで一生懸命応援しているんだと思う。でも中2

つて、実はまだまだお母さんが必要な年齢だよ。お母さんが待っていてくれる家があって、いつでもそこに帰れるという安心感があるからこそ、本当は苦手なはずの外で頑張れる。思春期だから親を疎んだり、部屋に籠ったりもするけど、本当はお母さんに見守っていてもらいたいし、傍にいて欲しい。そのアンバランスさこそが中学生なのよ」。

まさに目が覚める思いだった。学校で優希がとつてしまいう問題行動の元凶は、優希でも学校でもなく、母親である私自身にあったのだ。優希が必要としていたのは他でもない「優希ちゃんママ」であったことに、私はようやく気づくことができたのだ。

かくして私は「優希ちゃんママ」としての自分を取り戻すため、自分なりの「働き方改革」に取り組み始めた。

まず必要と感じたのは自らの意識改革で、「残業はしない」と心に決めることだった。それは仕事を疎かにするということではない。勤務時間内に最大の成果を上げるために、創意工夫出来ることは

決して少なくなかった。それから同僚の理解と協力を得ること。

「ちゃんと『お母さん』するために、なるべく定時に上がるよう努力したい」勇気を出してそう申し出た私に、同僚達は、

「近藤さんの思いはもつともで、自分達も同じように定時に上がる努力をしたいと思えるようになった。よい機会を頂いた」

と言ってくれた。みんな子育て世代、母親としての思いに大きなずれはなかったようだ。

さて、その後の私は、毎日定時とはいかないまでも、優希より先に帰宅できる日が続いている。夕餉の煮炊きの音と香りの中、お腹を空かせて帰ってくる優希を「おかえ

り」と出迎える。そんな何気ない当たり前が、今はとても愛おしく感じられる。

働き方改革は現代の日本社会における大きな課題とされている。だがその最初の一步は、意外にも、個人の小さな小さな一歩から始まるものな

ていねいに三つ編んで

夏はじめ みちる

佐藤家から

児童指導員 三井 正俊

佐藤家の彬が小学生になって2ヶ月が経ちました。入学した当初は学校から帰って来ると背負っていたランドセルを玄関に下ろすなり、「疲れた……」と言ってその場で倒れこみます。そして「もう学



校に行きたくない……」と言って天井を見上げたまましばらく動きません。そんな彬でしたが少し慣れてきたのでしよう、今は毎日元気に登校し一安心です。

そして彬にはもの凄い能力があります。それは他人の失くし物を見つける能力です。これまで数々の失くし物を発見し、みんなを助けてきました。この間、私が鍵を失くした時の話になります。私はすぐに彬に頼み、鍵を探すのを協力してもらいました。しかし、この時は彬をもってしても見つかることができませぬ。私は諦めかけ探すのをやめようとした時に彬が言いました。「神様にお祈りすればいいじゃん!」私は啞然としてしまいました。彬の口からこんな言葉が出るなんて信じられなかったからです。私は「そうだな! まずはお祈りだよな!」と言って、すぐに彬と一緒に祈りました。「神様、鍵がなくて困っています……」祈りの最中に私は彬がちやんと祈っているのか気になり始めたので、気づかれぬよう彬の顔をゆつくりと覗き

込んで見ました。するとそこには一心に祈る彬の姿があったのです。私は彬を疑った自分に恥ずかしさを覚えませんでした。

「まずは事務所の方から探そう!」祈り終えた後、再び彬と探し始めました。彬は「必ず見つかる」と確信に満ちています。そして事務所の入口まで来ると、なんとドアの横にあるフックに私の鍵がぶら下がっているではありませんか!彬と私は「あったー!」と叫びました。さっきまで、あんなに探しても見つからなかったのに、お祈りしてから1分も経たぬうちに見つけることができました。私は「嘘だろう……」と呟きながら彬の顔を見ました。彬は「ほらね」と言わんばかりの満面の笑みを浮かべていたのです。神様は彬の祈りに応えたのでした。

彬の失くし物を見つける能力は凄いなと思いますが、それ以上に疑いなく神様に信頼しきって祈る純粋な彼の心に感動しました。彬から「祈りの秘訣」を教えられた一日となりました。感謝です。

光の子どもの家の事業計画（1）

学習支援委員会

児童指導員 佐藤 義岳

連載開始にあたって

今号から、連載「光の子どもの家の事業計画」を始めます。

事業計画は、光の子どもの家のはたらきについて、年度ごとに作成するものです。分野ごとに担当者を決めて草稿を用意し、職員会議、理事会を経て決定します。

今年度は、〈祈り〉〈家族関係〉〈アフターケア〉〈地域との関わり〉〈心理〉〈実習生、研修生の受け入れ〉〈各委員会〉の章を設けました。

各委員会の下に、〈運営〉〈危機管理〉〈学習支援〉〈環境整備〉〈建築〉〈食生活〉〈研修〉〈広報〉〈情報通信〉〈行事〉の節をおきました。

事業計画は大切なものですが、検討期間が年末から年度末にかけての慌ただしい時期と重なります。そのため、じっくり協議する時間が取れなかったり、職員の共通理解が

十分に図れないまま新年度が始まってしまいがちです。

連載「光の子どもの家の事業計画」の目的は、①私たちに自身に、年間を通して事業計画について考える機会をつくる。②「光の子」を読んでくださる方に、光の子どもの家のはたらきについて知ってもらい、意見や助言をいただく。以上の二点にあります。

毎号、一つの章や節を取り上げ、事業計画の概要や背景を解説します。第1回は、学習支援委員会です。

学習支援委員会とは

学習支援委員会が扱うのは、子どもが通う学校や、家庭学習に関すること（宿題、受験勉強、習いごと）です。それらに付随して、進学や就職についての方針を協議することもあります。

基本的な考え方として、事業計画の子ども向け解説（※1）として用意した文章を掲

載します（本来はA4横書き、総ルビです）。

子どもとの約束

学ぶことは、みんながもっている権利であり、人生を豊かにするために大切なことです。だから、私たち職員は、みんなの学習を支援します。知っていること、できること

が増えれば、分かること、考えられることが増えます。みんなが学びやすい環境を整え、安心できるかわりを心がけます。できたことを一緒に喜び、みんなが自信をつけられるように応援します。

興味の幅が広がれば、見える世界も広がるし、毎日が楽しくなります。机に向かう勉強だけでなく、お出かけ、遊びも大事にします。生活をより文化的に、楽しいものにしていきます。

人は一人では生きていきません。一緒に時間を過ごし、時にはケンカをしたり助け合ったりする仲間が必要です。学校は、人とかわる力を身につけて、仲間をつくる場所として大事なものです。学校が、みんなにとって安心で、

楽しく、成長できる場所であるように、学校の先生方と協力していきます。

みんなの体と心の安全・安心を守ります。みんなにも、学習に取り組みたくないときや、分らないことがあるとき、イライラして人や物にあたってしまふことがあるでしょう。そんなときは、関わっている人も、つい声が大きくなったり、動きが乱暴になつてしまいがちです。でも、私たち職員は、子どもを感情的に怒ったり、怒鳴ったり、暴力をふるったりはしません。これは、いちばん大切な約束です。（※2）

光の子どもの家の外でも、みんなが学ぶ場で、怒鳴られたり、暴力をふるわれたり、理由もなく権利が奪われたり、生活にゆとりがなくなったりすることがないようにしていきます。理不尽に耐える経験ではなく、理不尽を正す経験を重ねられるように、私たちも働きかけていきます。（※3）

具体的に取り組むこと

* 小学校・中学校とは、各学期に1回、連絡会をしま

す。みんなのためにどんなことが出来るか、一緒に話し合います。

* できるだけ、一人一人にあった教育が受けられるようにします。人はみんな違います。何が得意だから偉い、何が苦手だからダメ、などということはありません。誰でも必要な支援を受け、自信をもって生活できるように応援します。(※4)

* 小学生の宿題や自主学習は、学習会で見ます。しっかりとサポートできるように、大人が2名以上で、かつ、子ども3〜4名・大人1名になるようにします。(※2、4)

* 学習ボランティアを募集し、職員と協力してみんなをサポートしてもらいます。

* 高校以上の進学は、入学するだけではなく、高校で何をやりたいのか、その学校が自分に合っているのか、卒業まで続けられるのか、その後的人生をどう生きるか、よく考え、話し合っ決めてみましょう。負担できる学費には限りがあります。できるだけみんなの希望を叶えたいと思っています。私立や通信制も含

めて、行きたい学校があれば、まず話してみてください。(※4)

* この事業計画の他に、学習支援についての細かい約束や、物事を進めるときの手順をまとめた文書があります。それらは、光の子どもの家の今までの経験を生かして、みんなの希望をできるだけ叶えられるように、みんなに公平に接することができるようにとめたものです。気になることがあれば、職員に聞いてみてください。

今年度計画の背景について解説します。

※1 子ども向け解説

草稿段階では事業計画の本文として用意していました。光の子どもの家は、子どもが安心して暮らせる子どものための子どもの施設、事業計画も、子どもが理解でき、子どもの意見を反映できるようにした方がよいのではないかと考えたからです。検討段階で、行政に提出する文書でもあることから、本文は大人向けの堅い文章になりました。

※2 いちばん大切な約束

昨年度、子どもから、職員の間が怖かったという声があがりました。学習会中、自分が直接言われたわけではなく、他の子どもに対する言葉がきつく、自分も嫌な気持ちになった、ということでした。その反省から、職員は、直接かかわっている子どもがどう受けとめるか、また、周りにいる子どもが見聞きしてどう感じるか、配慮したかわりをするか、それが可能になるよう、学習支援の場に職員を配置することを、計画に盛り込みました。

※3 理不尽を正す

理不尽は、わざわざ課して耐えさせるものではありません。子どもが不満や不都合を感じ、改めたいと思っても、意見を表明したり反映されたりするしくみは整備されておらず、それに取り組む時間も十分ではありません。私たちにも、子どもの保護者として、また子どもの福祉を図る機関として、行動する責任があると考えています。

※4 一人一人にあった教育

光の子どもの家で暮らす子

どもに限らず、人も家庭も、みなそれぞれ、違います。同じことを、同じやり方・速度で、やったり学んだり身につけたりするというのは、無理があります。

できるだけ無理がないように世の中が変わっていけばよいのですが、現に無理がある以上、補う必要があります。

高校選択について、数年前までは、埼玉県立高校全日制か、特別支援学校への進学が原則でした。現在は、子どもの多様なニーズに合わせて、定時制、私立、通信制も選択肢に含めて検討できるようにしています。

なお、加須市は茨城県、栃木県、群馬県に隣接しているため、3県の一部の県立高校に進学することも可能です。ここ3年、毎年「N高」に興味をもつ子どもがいます。しかし、まだ実際に進学させたことはありません。日中の過ごし方や、学習のサポートが課題になるからです。学校の他に、オフラインの人間関係が安定的して確保できれば、非通学型でもやっていけるかもしれません。

原点に帰って

保育士 遠藤 恵里香

時が経つのは早いもので、未だ2021年という響きに実感がわかずにいます。気づけば入職7年目を迎え、勤続年数だけ見るともう十分中堅職員であることに驚きを隠せません。私が光の子どもの家を知ったきっかけは、大学3年時に観に行った映画「隣の人」でした。当時、児童養護施設でのボランティアをしていた私は、児童養護施設でのボランティアをして1日3交代勤務であり、私がボランティアをしていた施設も同様でした。私が見る限り、子どもが落ち着かない状況である時、職員の方がシフトの時間通りに勤務を終えることはなく、勤務時間外でも子どもに付き添っていました。そんな光景を見たときに、ふと1日3交代の決められた時間内で子どもを育てることは可能なのかと疑問を持

つようになりました。そんなときに観に行った「隣の人」で、ほぼ住み込みのような状態で働いている職員の方々の尽力を目にしたことで、大学4年時、大学の実習先一覧にあった光の子どもの家での実習を希望し、初めて光の子どもの家にやってきました。実習は大まかな時間以外には特に何も決められておらず、朝食から夕食後の時間まで、適宜休憩を取りながら子どもたちと関わり、とても楽しく有意義な実習をすることができたと感じました。実習終了後も、卒業論文の協力もしていただいた関係もあり、ほぼ月1回のペースで施設を訪れていました。その当時、小学2年生だった楓に「また来たの!?もういっぱい来たじゃん」とうんざりした様子で言われたことは今でも鮮明に思い出されます。彼もまさかこの実習生が職員になって自分

の担当を7年もやることになるとは思っていなかったことでしょう(笑)。

当時の理事長に職員にならないかと勧誘され、迷いながらも、光の子どもの家の子どもたちの成長を見守っていきたいと考え、私は光の子どもの家の職員となりました。職員として入職した私は、もちろん歓迎される訳はなく、職員になって早々に、丘実から「お姉さん職員になるの?最初に言っておくけど、ウチ嫌いになった職員はとことん嫌いだから。」と宣戦布告を受け、一緒に遊んでくれるお姉さんから、職員になることは容易なことではないと実感しました。当初は子どもたちから試し行動のような反発もちょこちょこ受けたり、子どもたちの学校の予定などわからず呆れられたり(これは今でもある)などしていましたが、そんな私を、子どもたちが助けてくれることも多かったです。職員が子どもに助けられるというのは変な話かもしれませんが、その助けがあったからこそ、今もここで働き続けられている

のだと思います。私も微力ながら子どもたちの手助けができるよう努力していきたいです。

日々はあつという間に過ぎていきますが、思い返すと、辛いことよりも楽しいことの方が多く思い出されます。映画「隣の人」の中で、「これぐらいムカつくってことがあっても、このくらい可愛いとかありがたうって出来事があると、(ムカついた出来事が)なくなっちゃう。」という話がありました。が、本当にその通りで、きつと、職員も子どももこれの繰り返しで暮らしがつくられていくのだらうと思います。

昨年度からコロナウイルスの影響で、制限の多い生活を強いられています。が、こんなときだからこそ、子どもたちと楽しく笑顔で過ごすことができる日々をつくっていきけるよう心がけていきたいと思っています。



子どもが華道で生けました。

子どもたちのかがやきとともに

— 光の子どもの家をお支えください —

暑い日が続いていますが、子どもたちの元気な声が緑豊かな園庭から響いています。新型コロナウイルス感染防止のため、多くの地域が緊急事態宣言や蔓延防止対策がしかれるなかで不自由な日々をお過ごしかと思えます。光の子どもの家でも3月に例年ならば卒園する若者たちを、全てのメンバーとお客様で送り出す「出発(たびだち)の会」を行っていましたが、小規模で2名の門出をお祝いすることにしました。今年の卒園生は、専門学校進学、県内の企業に就職とそれぞれの道を歩み始め、充実した毎日を送っていると報告がありました。

今年もイースターの礼拝は教会に行くことはできませんでしたが、昨年から休むことなく行ってきた東大宮教会光の子どもの家分校でイエス様の復活をお祝いしました。

新年度幼児1名が仲間に加わりました。ひとつひとつのしぐさがみんなを和ませてくれています。小学校には2名が入学しました。ピカピカのランドセルが初々しく、片道30分近い通学路を年長児に負けじと歩いています。中学校には2名が入学。部活に勉強にと慌ただしい毎日ですが、充実した時間をすごしております。高校には6名が入学。全日制、定時制、通信制、特別支援学校、と様々な学校に進みましたがそれぞれの道でゆっくりと将来について考えてほしいと願っています。

新年度に入ってもコロナ対応に追われ、5月の児童福祉週間に行ってきた「子ども祭り」も、6月の地域の方々の交流の場として定着した「小さくても大バザー」も、昨年に引き続き中止となりました。どちらの行事もたくさんの支援者の篤い気持ちによって成り立っていたもので、楽しみにしていた時間がなくなりさみしい想いをしています。

本園の子どもたちが生活をする家の大規模改修の計画が具体的に動き始めました。

暮らしていて楽しくなる家、安心してすごせる場所にするために職員たちがチームを作り話し合いをかさねております。今後3年以内の着工を目指しております。いつもみなさま方にはお願いばかりで心苦しいのですが、子どもたちの生活環境を整えることができますように、必要が満たされますようにご支援を引き続きお願いいたします。

皆さまのご健康が守られ、祝福が豊かにありますように。

社会福祉法人 光の子どもの家 理事長 大高晋一郎
光の子どもの家を支える会 代 表 永野 三恵

郵便振替 00130-1-128022

他銀行からのお振込み

銀行名	ゆうちょ銀行	店名	019 (ゼロイチキュウ店)
預金種目	当座	口座番号	0128022
店番	019	金融機関コード	9900

日誌抄

2021年4月～6月

【6月末現在の在籍児童数】

幼児 3名 小学生13名
中学生6名 高校生10名
その他1名 計 33名

【4月】

1日 小西副施設長と龍太、
哲之、礼が中禅寺湖へ（車
中泊）
5日 進級進学祝い
5日～17日 各学校入学式
7日 後援会役員会
16日 職員礼拝 若月健悟牧
師（守谷教会）
19日 4月生まれの誕生会
23日 夕礼拝 木田浩靖牧師
（東埼玉バプテテスト教会）
25日 元職員峯寄来訪
28日 後援会総会
30日 通報避難訓練

【5月】

3日 小西と龍太、哲之、礼
が名栗湖へ（車中泊）
14日 園庭害虫駆除
17日 淑徳短期大学実習受入
開始（～28日、2名）
20日 施設内健康診断
21日 職員礼拝 若月牧師
第4回フードパントリー

【6月】

6日 東京家政大学実習受入
開始（～20日、2名）
19日 法人監事監査、評議委
員会
25日 夕礼拝 木田牧師
26日 法人理事会

【委員会の主な動き】

運営 就業規則・公休・業務
分担の見直し
危機管理 毎月避難訓練を実
施、本園にAEDとさすま
たを設置し職員研修実施
学習支援 小学生の平日帰宅
後と土曜午前の学習会継続
環境整備 園庭の枕木整備
建築 大規模改修に向け複数
の企業と打ち合わせ
食生活 子どもの補食、夏期
の食材取扱、調理の一部一
括化について協議
研修 児童精神科医による職
員研修実施、久喜CAPの
職員・子ども研修を準備
広報 「光の子」編集・発行
情報・通信 高校生4名スマ
ホ購入、子どものネット使
用ルール整備に着手

【寄贈者各位】

浅野瞳 穴水光子 稲塚由美子

24日 5月生まれの誕生会
28日 夕礼拝 木田牧師

今成勝江 大塚東一 大原浩子
小澤喜代子 鎌倉慎太郎 北郷
明子 木村郁子 木村栄 小林
幸子 斉藤克枝 櫻井秀夫 佐
藤尚子 島野信子 清水亨桐
関圭子 高橋和男 鳥海良子
内藤芳江 中島睦雄 中屋千晶
丹羽吉康 根岸亜麗朱 慈恵病
院長蓮田健 長谷川一男 原
田清司 樋口 増田智己 町田
景子 山口榮子 湯澤真彦 渡
辺幸子 一般社団法人すくすく
広場 加納畳店 久喜CAP
子育て応援フードパントリー加
須北支部 子ども食堂 ゴルフ
ドウ 昭和化成工業 セカンド
ハーベストジャパン 第一生命
高橋会計事務所 チュチュアン
ナ1%クラブ としのぶさん家
の粉 富田農園 なとり 梅林
堂 フレーベル館 マルハン古
河店 (敬称略)

【ボランティア各位】

〈華道〉岡本有代 〈手芸〉山田
智 山田裕子 〈学習〉久米村
貴子 常松洋介 鶴見もえ 向
井進 横山零樹
他多数の皆様 (敬称略)

【お礼】

前号でお願いした鯉
のぼりの矢車を、地元の支援者
よりご提供いただきました。あ
りがとうございました。



園庭の枕木道の交換を進めています。

ご提供くださる方がいましたらご連絡ください。

【発行】社会福祉法人 光の子どもの家 【住所】〒349-1155 埼玉県加須市砂原277

【電話】0480-72-3883 【FAX】0480-72-6649 【メール】hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp

【Webサイト】http://www.hikarinokodomonoie.com/ 【振替】00130-1-128022

【印刷】(株)エル・アートデザイン